



Title	【interview】アート場の場、場のアート 川井田祥子 さんに聞く
Author(s)	桑原, 英之
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 27-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71173
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【interview】

アートの場合、場のアート
川井田祥子さんに聞く

聞き手：桑原英之

i まず今年の
モンズの感想をお
聞きたいのです
が。

川井田（以下k）
なんとと言っても

今回は、二人の
アーティスト（岩
下徹（注二）さん、
北山善夫さん／美
術家）の力が大き

かったですね。コモンズというイベント全体を
作り上げる上で、お二人の存在感が大きく影響
していました。私個人の感想ですが、これまでに
コモンズでお招きしたアーティストとは、また
違ったタイプのアーティストでしたし、「参加者
とアーティスト」というライン、あるいはその結
びつきを特に強く作り出せたのではないかと
思っています。ただ存在感が大きかっただけに
「他」と「他」の関係、つまりコモンズに参加し
て下さった方同士の直接の交流は少し難しかっ
たのかなという印象も持っています。参加者同
士の関係にも、意識的か無意識的かは分かりま
せんが、どこか、アーティストを経由してつな
がっていたような、そんな感じがするのです。例

えば今回、臨床哲学の哲学カフェには岩下さん
も参加されていましたが、これまでの哲学カ
フェと少し雰囲気違って・・・

i 確かに少し違っていました。参加者の多くは
岩下さんに向かって話していました。特に前半
は。

k 参加者としてアーティストの話を聞きたい
という気持ちはわかりますけどね。アーティスト
に直接自分の意見をぶつける機会なんて、な
かなかありませんから。ただそうすると必然的
に、アーティストとの一問一答的対話へとスラ
イドしていきますね。コモンズフェスタという
イベントでは、来られた方の主体的参加という
ことを意識していますし、ですから「観客」では
なく「参加者」とお呼びしているのですが、今回
のコモンズがその理念に沿っていたのかどうか、
まだ十分に整理できていないのも確かなんです。
ただそれは最初の企画段階で考えておくべきこ
とだったのかもしれない。それでも「アートコ
モンズ」として、アーティストを介してのコミュ
ニケーション回路を一応つくりだせたかなと思
います。

あとこれは個人的希望なのですが、アーティ
ストがコモンズの期間中に会場をあちこちウロ

ウロでできたらよかったかなと思います。例えば去年お招きした美術家の井上廣子さんは、期間中に何度かいらつしゃって、作品を見に来られた方と話をされることもありました。ただこればかりは現実問題として、お二人とも大変お忙しい方ですし、時間的に無理だったとは思いますが、それでも事前に打ち合わせをして実現できたらかったかなと。これは来年への抱負も込めてですね。

i 今年「アートコモンズ」というタイトル通り、アートを全面に出しました。これまでもアートとの関係性は強かったと思いますが、今年は特にアートとして見せるということに力をおいていたのでしょうか。

k これも正直に言いますと、アーティストの人選がまず先にありました。これまで広報面でけっこう苦労してきたからなのですが、お二人の名前を前面に打ち出すことで壁を越えようと考えたことも確かです。もちろんそれが全てじゃありませんが。

i コモンズの企画の進め方も例年とは違っていたように感じます。

k そうですね。これまでコモンズの大きな狙いの一つとして、参加団体同士の交流ということがありました。そのため、各参加団体のメンバーに実行委員になってもらって、コモンズ開催までに実行委員会を開き、交流を深めようとしてきました。それはわれわれ鑑院サイドの希望でもあったわけで、これまで実際に、活動内容や方向性が全く違う団体が出会える場としてはうまく機能してきたのではないかと思います。本当はそこからさらに進んで、団体同士のコラボレートによる企画が生まれればいいな、と。でも去年あたりから、「そもそもそういうことを各参加団体の人達が望んでいるのか？」と考え直すようになって。普段は別のお仕事をされながら活動している方が多いですし、自分たちの企画だけで手一杯な面があることも分かってきましたから。だから団体同士が直接つながることは現実的にむずかしいかもしれない、ならどうすればいいかということでは試行錯誤したのが、今年のコモンズです。例えば哲学カフェの場合、岩下さんのダンスWSと運動した形でお願いした理由の一つに、そういうこともありました。団体同士が難しいなら、事務局が間に入ってつながってみる。また「アートコモンズ」ですから、アーティスト同士のつながりということも重視する。今回、後者は特にうまくいったのではないかと

思っています(注二)。

i アートコモンズという企画は最初に誰が考えたのですか？

k 秋田です(注三)。毎年年末に反省会をして、来年どんなことをしたいのか考え始め、春頃にはスタッフが全員集まって会議をするのですが、今年の会議の際、ふとこれが閃いたそうなんです。それでゴロもいいし、これでいいこうと(笑)。

i その今年のコモンズの中で川井田さんの役割はなんだったのでしょうか。

k ここからここまでというふうに明確には決まっています。ただ今年に関してはやはり岩下さんと連絡役ですね。「岩下さん付き」と言っているくらい(笑)。逆に言うとそこにエネルギーを注ぐ分、他のスタッフの仕事に対してあえて少し距離をおいていた面もあります。それぞれがそれぞれの責任で仕事をこなせるようにという。例えば北山さんの美術の展覧は大塚が担当し、大学の公開ゼミは池野、ドラマカフェ(注四)は柳沢、そしてその人の責任で企画を具体化していく、といった具合にです。それは

それでよかったのですが、各担当の仕事内容の共有やスタッフ同士の連携に関しては反省点もあつた気が・・・。

i それはうちの研究室でも同じですよ(笑)。

k (笑)。そうですか。どこまで自分の判断で進めてどこから共有するかという線引きって難しいですね。

i 川井田さんが担当された岩下さんとは、事前に何度も打ち合わせをされたのでしょうか。

k 岩下さんをお願いすることになった最初のきっかけは、志賀さん(注五)とお会いしたことなんです。二〇〇二年秋に行われたNPO法人DANCE BOXの発足記念パーティーで直接お話しする機会があり、その時、いつか應典院で岩下さんの公演をしたいですねという話を温めながら、それだったら次のコモンズでやれたらいいなと思って、他の應典院スタッフにはかり了承を得ました。そして志賀さんとスケジュール調整をはじめて、やることは決まったのですが、岩下さん本人は直前まで山海塾の海外公演があり日本にはほとんどいらっしやらな

かった。だから具体的なことを岩下さんと直接話し始めたのは九月末ぐらいからですね。その間は志賀さんとやりとりを続けていました。それで岩下さんが日本に戻られてお二人そろって應典院に下見にいらっしやったのですが、そして今度には志賀さんがコモンズ当日には来られないことが分かったんです。志賀さんが関わってらっしやる別の企画と日程が重なってしまつて。

i 確かに当日、志賀さんがいらっしやらなかったんで、なんでだろうと思ってました・・・。

k 実はダンス公演を主催するのはほとんど初めてでしたから、その意味でも少し慌てました。いや本当に「ええー？」って感じでしたね。二年前のコモンズでも清水啓司さんの「ダンス参観日」という企画はやったことがありましたが、プロデュースした方に当日の進行をお願いしてたんです。今回は細かなこと一つひとつを岩下さんにお聞きしながら進めていた状況で・・・いたらないことも多々あったと思いますが、岩下さんはすべてを受け入れて下さいました。どんな状況でも自分の最善を尽くすという姿勢を目の当たりにし、とても学ぶことが多かったです。

i 應典院の中だけでなく、墓地で踊るというパフォーマンスがありましたしね。このアイデア(注六)は應典院サイドから提案したのでしょうか。

k いえ、岩下さんからの提案ですね。話しが前後しますが、岩下さんと北山さんの参加が決まった後、お二人にコラボレーションをもちかけました六月末ぐらいですかね。お二人は互いに面識がありませんでしたし、志賀さんと展覧会をプロデュースした樋口さんも交えてとりあえず一度会って話しをしようということになったんです。そして京都でお会いし、應典院についても写真や資料をお見せしながら説明していたのですが、その中の應典院に隣接する墓地の写真を岩下さんが見て、ここで踊ってみたいとおっしゃられた。それが最初のきっかけですね。

i でもよく決断したというか、許可がおりましたね。お墓の所有者を含め理解を得るのは大変ではなかったですか？

k 場所が場所だけにその場ですぐお返事もできませんでしたので、とりあえず話を持ち帰り秋田に伝えました。秋田は前向きに捉えてくれたんですが、やっぱり大連寺の住職ですから、

守ってもらいたいことも当然ある。だからそれを守っていたらダメなならばという条件で、OKが出ました。檀家さんにはお彼岸の集いなどの際に、秋田から事前に説明し、理解と協力を求めました。岩下さんにも守ってほしいこと、例えばここだけは触れないで、というようなことをお願いして実現できました。

i それでも普通のお寺ではできないですよ。最初に思ったのは、應典院という場所の意味や、秋田さんがコモンズなどを通してやろうとしている事が少しずつ地域に浸透してきたからこそできたんじゃないかと思うのですが。

k どうなんでしょう。ただ、地域密着と言えるほどに應典院の活動が地域社会にとけこんでいるかという点、必ずしもまだ十分ではないかもしれないですね。あ、スタッフとしてこれは問題発言かな（笑）。でも地域に根付くとき、二通り考え方があって思うんですね。一つは内側から直接に地域とつながっていくやり方。もう一つは外側から埋めていくやり方。そして今のところ、私たちは後者の方法で進めていると個人的には捉えています。つまり應典院という場所の存在や活動の意味が、地域より先にまずどこか別の場所や人によって認識されたり評価されたりし

て、そしてその評判が徐々に地元地域にも伝わっていくというのか。「ああ、自分たちの地域にこんな場所があったんだ」という具合に、第三者や口コミを通じて改めて再発見するという、そういう方法ですね。その意味では今は外の方で浸透しつつあるのかもしれない。だから、徐々に、少しずつ、ですね。

i 大学もその点は同じ気がしますね。地域とのつながりといっても、近隣の住民が敷地内を犬の散歩に来る程度ですから。それに関連して「方法としてのアート」についてお聞きしたい。というのは應典院では講演はもちろん、NPOなどのグループ活動のために場所を提供することもあります。その中でもとりわけ應典院はアートに力を入れているように見えますがなぜでしょうか。

k アートへの注目は、きっと秋田の頭の中にはずっと前からあったのだと思うが、実際にアクションを起こし始めたのは比較的最近なんです。最初のコモンズは、福祉系のワークショップなどが中心でした。たまたま私がスタッフになった二〇〇〇年ぐらいからですね。その頃、樋口さんがアーティスト仲間と「アートバックキング」というプロジェクトを進めていました。文

字通り建物全体をアートでつつんでしまおうという企画で、應典院でやりたいという希望があり、それならばということで、コモンズでその企画をやった。それがアートと深く関わりができた最初です。

i シアトリカル應典院（注七）としての活動もその頃ですか。

k それは應典院が再建された一九九七年からですね。秋田とも古い付き合いのある應典院寺町倶楽部運営委員の西島さんという方がいて、その方ともこの場所をどう活かしていくかをいろいろ考えたそうです。その相談の結果、ここが劇場であるということを出していく方向性、「シアトリカル應典院」としての方向性が決まりました。

i では演劇への関わりはすごく早かったんですね。

k ええ。もちろんそれ以外の可能性もいろいろ考えてはみたようですけど。九七年の四月に再建されて五月にオープンディングイベントをやったときに、どういう人達に使ってもらおうののかがというのをラインナップしてみた。そ

してその中からどれがいいだろうということではいろいろな意見を聞いた結果、一番反応が良かったのが演劇だったという！

i ただ演劇との関わりは早かったけど、特にアートということが意識され始めたのはやはり二〇〇〇年のコモンスズですか？

k そうですね。実は最初、アートバックキングの企画を開かされたとき、私は「アートねえ！」という感じだったんですよ（笑）。いや、ほんと、正直そうだった。それまで私自身はアートと縁遠くて、あまり知りませんでしたから。秋田がなぜアートに注目するのか、半年ぐらいはよくわからなくて。

i それでもアートに注目していくようになった。続ける中で、アートを介して関わるといったことに対する意識が変わった？

k 私個人に話しを限定すれば、後から振り返ってみて分かったという気がします。二〇〇〇年のコモンスズをやっている最中も、十分にはみえていなかった。そのへんのことは。でも終わった後でいろいろ考えるようになったんです。例えば会報紙「サリユ」の座談会でいろんな人の

話しをきいたり、自分で調べたりして、もう一度自分でアートを捉え直すようになった。そこで見えてきたのは、アートが狭義の美術に限定されるわけではなくて、「多様な価値観を認め合うツール」になるんだ、ということですね。それが大きい。だからその意味で、いまは、コモンスズが現代アートに関わってきたことにはすごい意味があると思っています。というのも、まさに私たちの常識や日常的価値観にゆさぶりをかけてきますから。

i 同時にだからこそ一番難しい。

k そうですね。簡単には理解されないし、受け入れられにくい。

i それでも川井田さんのなかでは何か確信がある？

k 私はもともとNPOやボランティアの分野に長く関わってきましたが、そこである限界を感じたようになったんです。例えば講演などを企画した場合、講演内容に興味のある人しか来ないですよ。そうすると、一生懸命やればやるほど、どんどんたこひたしてしまふ。いろんな人に関係するテーマだったとしても、一番来て

ほしい人に来てもらえないというジレンマをずっと感じていたんです。そのジレンマについては今も無くなったわけではないんですが、それに対する一つの方法というか道筋として、アートがあるのかなあとということに気付くようになりました。アートって何の気なしにやってきて見たり触れたりするものじゃないですか、特別理由がなくても。そして知らない間にそのアートを紹介して問題意識に目覚めたり、或いは作品を見た他の人と一瞬にして何かを共有していたりすることもあります。その間口の広さですかね。確かにある一つの問題意識やテーマについて鮮明に問いかたり、立場を問うたりすることはないかもしれませんが、そのことがかえって関わりの幅を広げるような、そんな気がします。

i 確かに人を迎え入れる柔軟性のようなものがアートにはありますね。私もコモンスズに関わるまではあまりアートのことは知りませんでした。が、例えば私の場合、去年のコモンスズで井上廣子さんの作品や本人と出会えたというのは本当に大きかった。その意味で、アートを介してきっかけをもらった一人かもしれません。

k ありがとうございます。確かにコモンスズで

やっていることに關してある種の確信というか手応えはあります。でもそれもまだ主観的レベルでそう感じるという、そういう段階ですね。これは評価の問題にも関わってきますし難しいのですが、全体として、あるいは客観的にみてどう評価するのかという、その全体像を、私自身まだ掴みきれない面もあります。例えば今年のコモンスズでいうと、アーティストトークの時に観客席から発言された年配の女性がいっぱいいましたよね。たまたま新聞で岩下さんの公演が行われることを前日に知って、翌日午後の幕地のパフォーマンスを見に来て、続けて夜の部の公演とアーティストトークにも急遽参加されました。そしてとても感動したとか、いろいろ

発言して下さった。ああいう一言には救われまじし、手応えというのもそういうところからですかね、感じるのとは同時に、そういうことの積み重ねの中で見えてこないのではないかなという気もしてゐるんです。勿論、それだけではまずいのでしようが、ただやはり素朴に、例えば公演の後、本堂ホールから出てきた人の顔が満足そうだとか(笑)、そういうこともやはり大切だし、力になる。

i 評価の問題は難しいですね。芸術に限らず、人文系一般に言えることですが。少し話題を變

えます。コモンスズではインターン制度を通じて学生がスタッフとして関わっていますよね。彼、彼女たちはコモンスズの中でどういう役割で動いているのでしょうか。

k 正直に言えば、インターンを受け入れつつも、彼、彼女らに力を注いで育てるほどの余裕はあまりないんです。八月から来てもらうのですが、その時期だと広報の段階になってしまふ。経験を積むには、本当は企画の段階から入れるのが一番いいのだとは思いますが。だから毎年なんとかしたいなあとは思いつつも、なかなか手が回らないですね。勿論、学生たちはよくやってくれたと思つてますが。せめてコモンスズや日常の仕事を通じて新しい人に出会い、何か掴んでもらえればいいかと。半分聞き直つてますが(笑)。また今年はコモンスズが終わった後に、参加団体の人へのインタビュを担当してもらつたので、そっちの方で得るものがあつたかもしれません。

i すこいしつかりしました(注八)。少なくとも私のインタビュに比べたらはるかに。

k (笑)。でも本当に余裕がないです。そうやってせいでいい機会をつくることぐらいしか。だからあとは自力で掴んでくれという。

i 先ほどもでた「シアトリカル應典院」の事についてもう少しお聞きしたいと思います。演劇もアートですが、その見せ方というのか、演劇への関わり方もここは少し変わっています。今年は特に、若手の劇団を育てるための仕組みを積極的に打ち出しています。

k 演劇祭(注九)のことですね。実は再建当時からだいたい年一回ぐらいはやっていましたよ。ただ昨年からは、このままではちよつとまずいだろうということで、内容を見直して企画を立て直そうとしてました。そのための話し合いをしていたのが二〇〇二年の二月か三月のことで、くしくもちょうど扇町ミュージアムスクエアや近鉄劇場の閉鎖のニュースが相次いだ時期だったんです。そういう時流もあつて、百人ぐらいの収容人数の應典院という場で何ができるのだろうと、話し合いを重ねて考えた。例えば自分たちが劇団を育てるというのはどうか。でもそれはおこがましいだろう。演劇を普段からよくみてゐるわけでもないし、ましてや内容を評価する力があるわけでもないし、今更それを磨こうというのもちよつと違う。そこで一つはつきり見えてきた方向性が、演劇と社会をつなぐということの接点としての役割を担つていこうということ

だったんです。そして制作者の育成に力をいれよう。

i その場合の制作者というのは？

k 定義をはっきりさせているわけではありませんが、まずはマネジメントですね。どこに広報をかけて、どこにチケットを買ってもらうかという。あと助成金の申請をしたり、スタッフを束ねて段取りをつけたら。お金のやりくりを含めて仕事の範囲は広い。でもそれだけではなく、もっとも必要なのはプロデュース能力ですね。さっきも言いましたが、社会と演劇をつなぐ接点をつくりだすこと。それが夢というか、希望ですね。演劇祭をリニューアルした去年は一般公募で劇団を募集しました。旗揚げ五年以内の若手劇団で制作会議に出席できることが条件です。本当は専任の制作者がいる劇団が望ましいのですが、今のところ制作者と代表と作家を兼ねてなえた劇団がほとんどなので、制作担当としてメンバーが会議に出られることを条件にしています。応募してくれた二六劇団から七劇団を選び、ほぼ一年間かけて、一二月に一回のペースで会議を行い、互いに情報交換しながら積み上げていったのが今年の演劇祭です。私たちは作品を見て劇団を選んだわけではないし、作品

の内容をあれこれ評価するわけでもない。その点、他の演劇祭と比べてかなり異質でしょうね。

i 一年間通して変化はあったのでしょうか。

k 最初、七つの劇団の間に横のつながりはあまりなかったようです。またお互いになんか広報活動をしているのかというところも知らなかったみたいで、自分たちで芝居を打つのに精一杯という感じでした。でも、会議を通じて、例えば助成金の申請先だとか、少しずつお互いの情報を共有していったし、あと企画書の書き方ですね。劇団によって書き方も違ってましたから、その辺もお互いを参考にしつつ進めていった。五月には豊楽院の本堂ホールで記者発表をやりました。さっきも話しましたが、劇場閉鎖が相次いでいたこともあって多くのマスコミ関係者が来てくれました。

i その劇団のメンバーが今回のコモンズ期間中に、ロビーでカフェを開いてました。

k これは私が言い出しっぱなしなんです。劇団が演劇の世界のなかで閉じてしまっていたはずではないかと思ってましたから。なんか偉そうですけど。それに会議を通じて他の劇団

のメンバー同士も親しくなっていましたし、コモンズにも興味をもってくれるかなと思って「カフェやらへん？」と気軽に声をかけたんです。したら話に乗ってくれて。当日は演劇について深く語るとか、そこまではいかなかったかもしれないんですが、普段あまり演劇になじみのない人や年配の方がふらっと立ち寄って、演劇人と話しをするという場は作れたかなと思いますね。ただこれも思った以上に準備や仕込みが大変でしたから、劇団の人はえらいこと引き受けちゃったと思ったかもしれないですね(笑)。

i アートについて語る場所はどこにあるんだろうと、時々思います。だから今回のドラマカフェという、劇団の人がカフェを開き、演劇について気兼ねなく語る場所を作ろうとしたことの意味って、結構大きいように思えるのですが。今後こういう場をつくりたいと思ってらっしゃいますか。

k それは思いますね。まだ充分に手が回らないですけど、今後もそういう場を多くつくれたらという希望はありますね。さっきの演劇祭でも各劇団に、三回公演があったらそのうち一回は必ずアフタートークの時間をつくってもらいましたし。いずれにせよ、何か仕掛けも必要なの

かもしれませんね。時間と場所の問題ももちろんですが。

i なぜアートなのかということの理由の一つに、関わりやすさということをおっしゃってました。そして確かにそれはあるんだけど、じゃあ関わった後にどういう展開の可能性があるのかということにはまだ難しい面が残っている。

k 入り口の関わりやすさがある反面、その出口というか、どうその後の展開につなげるかというアウトプットの問題はまだこれから課題でしょうね。それこそ本当に、作品を展示するのと同じくらいのエネルギが必要だと思います。ただ繰り返しになりますが、そこはやはり工夫の仕方があるんだと思います。その時はまた臨哲さんとも協力して何かやれたらいいですね。

i ありがとうございます。精進します(笑)。

(注)

一 即興ダンスを中心とする舞踊家、ダンスセラピーの活動も行っている。

二 死亡記事を扱った北山さんの作品を二階ロビーの壁一面に張り出し、それらの作品越しに墓地での岩Dさんの即興ダンスを見るという企画と、本堂ホールに展示された北山さんの大型作品の前での即興ダンスというコラボレーションとがあった。その後、展覧会をプロデュースした樋口よう子さんとともに、アーティストトークが行われた。

三 應興院主幹／大蓮寺住職。コモンズフェスタを含め應興院の活動の中心を担ってきた。それ以外にも、その枠におさまらない経歴がある。一度應興院HPにあるプロフィールをご覧ください。

四 コモンズの期間中、二階ロビースペースにて7つの劇団員がカフェを運営していた。劇団についてはインタビュ後半でもでてくるのでこちらを参照。

五 志賀玲子さん。(有)シューツアンドルーツ代表。京都造形芸術大学舞台芸術研究センターやアイホールなどのプロデューサーを務め、コンテンポラリーダンスの企画を多数手がけている。

六 應興院に隣接する墓地で行われた岩下さんの即興ダンスのこと。

七 この後の話しに出てくるように、應興院では演劇祭はもちろん、劇場としてもよく知られた場所であ

る。シアトリカル應興院とはその場合に使われる名称。

八 ちなみに臨哲にインタビューに来たのは唐沢なみさん(立命館大学)。

九 二〇〇三年は「SPACE×DRAMA二〇〇三」にて七劇団(千年枕、劇団鹿殺し、しかばんび、ミヤコ三三三、×××、劇団アックスピ、特攻隊台本三三三、満月動物園)が公演を行っている。

かわいだしようこ

二〇〇四年三月までは應興院ディレクターを務めていたが、この四月からは、関連の出版会社で編集の仕事に携わっている。